

第3回百年史研究会・概要

2009（平成21）年7月23日、折田悦郎氏（九州大学大学文書館教授、同大学史料室長）を講師として、第3回百年史編纂事前研究会が行われた。

折田氏は、『九州大学75年史』編纂時から九州大学史に携わってこられ、その後、編纂室から改組されて1992年に設置された「九州大学大学史料室」時代から、2005年より発展的に設置された現在の「九州大学大学文書館」まで、20年余りにわたってその中心となって活動されている。2009年度からは文書館内に百年史編纂室が設置され、現在は副編集長として年史編纂に取り組んでいる。

講演は、（Ⅰ）大学アーカイブスが設置されてきた経緯、（Ⅱ）年史編纂後の九州大学大学史料室の設置、（Ⅲ）新たに改組設置された九州大学大学文書館の目的と機能および百年史編纂事業について、という大きく3つの柱に沿って、次のような内容で進められた。

近年、国立大学を皮切りにして私立を含めた大学の多くがアーカイブスを設置する風潮となってきている。その大学アーカイブスの基本的機能は、①大学に関わる資料収集整理、②調査研究、③教育活動であるが、そのほかにも社会的アカウンタビリティという重要な使命も課せられている。

大学アーカイブスにおける活動の重要なポイントとしては、兼務となる教職員に如何に協力してもらうか、そのポジションや役割を明確に打ち出すことであると考えている。九州大学大学文書館となってから4年経つが、現在までに法人文書の移管もさることながら個人文書の移管も多い。これらについて職員の協力のもと文書移管を円滑に進め、学内の教員とともに共同研究を行っていくことは主要活動の一つである。また、九州大学ではもともとオーラルヒストリーに重きを置いてきたことも特徴の一つと数えられる。

九州大学文書館ではこれまでに、全学教育の一環として九州大学史の授業を開講するため、「九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（C）」を受けた共同研究「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」を行い、その成果をもとに財団法人九州大学後援会助成事業費を受けて九州大学の歴史に関する教科書『大学とはなにか ―九州大学に学ぶ人々へ』（2002年）を編集出版するなどを通して、全学的な広がりを持つ活動を推進してきた。1997年度より開始した「九州大学の歴史」に関する自校史教育の授業は、国立大学では最初の画期的試みであった。そのほか、新キャンパスの建設・移転の様子を映像や画像で記録する「九州大学『記憶の保存』プロジェクト」を推進し、また「九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現況調査について」「九州大学『伊都キャンパス』記録プロジェクト」等を立ち上げるなど、数々の研究を進めている。

九州大学では今年度（2009年度）より、新たに百年史編纂室を設置した。基本的に文書館と編纂室とは別の組織であるべきというのが個人的見解である。しかし、全学組織でやるべきであるというのと、文書館発展のためにアーカイブス中心でやればよいというのと、双方の学内意見があり、結果的に文書館内に編纂室が置かれることとなった。百年史編纂にあたっては、教員待遇の室員を2名、テクニカルスタッフ2名という、専門研究者を新たに置くことは絶対に譲れない条件として提示した。百年史の刊行は8年後を予定している。

今後の文書館としての課題も多くある。どこもそうであるが、収蔵スペースの問題である。面積がとにかく足りない。また、学内での文書移管がいまだ義務となっていないこともある。また、個人資料受け入れ・活用における個人情報の取り扱いも今後の課題の一つである。

大学アーカイブスは、きちんとした組織になれば、大学として非常に「使いがいのある」組織である。大学理念を常に確認していくことにも繋がっていく。大東大における年史編纂に向けても、他の私大も参考にしつつ、まず体制整備を進めていくべきだろうと思う。

（想起記録：大東文化歴史資料館 浅沼薫奈）

・・・第3回百年史編纂事前研究会に参加して・・・

— 内部制作型の課題 —

第3回目となる研究会は、九州大学大学文書館教授の折田悦郎先生を講師にお迎えし、大学文書館の設立経緯と百年史編集体制の現況についてお話いただきました。

九州大学では、今年（2009年）の1月に、百年史編集室を大学文書館内に設置し、8年の編集期間を予定して2017年完成を目途に百年史編集事業に着手しているところだそうです。そういう意味では、百年史編纂準備室の開設を目指している大東文化歴史資料館にとって、極めて近い事例研究の対象となりうるものでありました。

近年、大学史編纂の態様としては、内部制作型と外部委託制作型の2つの流れがあります。九州大学においても、当初は、出版社などに外部委託したらどうかという声があがっていたそうです。ところが、折田先生は、これに反対し、学内・学外に向けて大学の理念を明確にすることが大切であると訴え、内部制作型に決定したそうです。その際、内部制作型の重要なカギは、人的スタッフをいかに確保するかであり、一番力を注いだ局面であったようです。



現在、九州大学大学文書館では、専任教員3名（教授1、准教授1、助教1）、専任館員2名（テクニカルスタッフ＝学術調査員2）、専任事務職員1名、事務補佐員2名を擁して百年史編集事業に取り組んでおります。本歴史資料館の直面する課題も、やはり、人的スタッフの確保にかかっているのではないのでしょうか。

（大東文化歴史資料館運営委員・東洋研究所教授 兵頭 徹）